

---

# 異世界×あたし

緋雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界×あたし

### 【Nコード】

N2409BA

### 【作者名】

緋雨

### 【あらすじ】

気付けば、綱無し空中バンジーをしていたあたし。へたれな魔族とやらに運良く(?)助けられて、何故か契約とやらを結ばれた。美人な教育係(苦勞人属性)の竜人さんに喜ばれたり、知らないうちに獣魔とやら(猫耳青年)の飼い主になってたり……。ははっ、どうやらあたしも、まともな感性とやらじゃないようです。

異世界トリップ色々ごったませです。厨二チックだったりご都合主義だったりする、見切り発車で書いたものの転載です。一話毎が短いです。

## 01・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】(前書き)

このお話はー…

- ・二つの視点でコロコロ変わりながら話が進みます
- ・ジャンルはギャグでシリアスでほのぼので恋愛(逆八?)でしつとりです
- ・ナチュラルに厨二チックなもの出てきます。ぐだぐだです
- ・ノリと勢いとテンションで書かれてることが多いです

以上のことを許容できる方のみどうぞ。

## 01・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】

あたしの名前は堂本雪菜。

まあ、名前なんか正直どうでもいいんだ。

何よりも大切なのは、あたしがこの物語の主人公であって、

……主人公なんだから少しはまともに扱ってよね！

って言う主張をちゃんと通したいってこと。

【第一節】つまりは成り行きって訳で

あれ……。あたし、なんで落ちてるんだっけ？

あたしはただ、今日は何しよっかなあ。ゲームの続きでもやるっかなあ……。あ、でも明日当てられそうだから英語の予習した方がいいんだよなあ。ああ、めんどくさ……。とかなんとか思いながらダラダラ歩いていただけよね……？

なのになんで命綱無してバンジーしてるんだっけ……？

ここは綺麗な青色の空。周りには白い雲。サンサンと照る太陽が眩しい……。

……じゃなくて。そんなこと考えてる場合じゃないっつーの！  
だってほら、地面に近付いてる！ ぶつかって！ 痛いよっ！  
？ つーか、今更だけどもめっちゃめっちゃ怖いよっ！

「いやああああああっ！」

ちよっと（？）出たお腹の底からあたしは絶叫した。

いや、だって本気で怖いから。つーか無理！ 普通に無理だから！  
それでも重力に逆らえないから、どんどん落ちて行くしかない。  
あたしの抵抗といえぼんの些細なことだけど、精一杯手足を伸ばして落下速度を落とそうとする無駄な試みだけだった。

いきなり視界が開けた。

雲が途切れて一面に広がる世界は、緑がいっぱい、変な機械の町や、でっかく聳え立つ岩肌の山々。真っ青な海にはおおダコが泳いでいたりして……。

って……おおダコオツ!!？

何？ とうとう頭の中までゲーム化しちゃったりする!? 末期ですか!? 末期症状の幻覚でも見ちゃってますか!?  
うわっ、ちよっと大丈夫なのかあたしいっ!?

変質者に襲われたときの対処法や、テストの切り抜け方とか、その他ぶっちゃけどうでもいいだるなことはサイトとか人づてで見

たり聞いたりしたよ？

でも、落ちたときの対処法なんて……。

誰も知ってるわけないだろうがああああああっ！

01・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】（後書き）

ちまちま進みます。

とりあえず、彼女、と視点を置きます。一節ごとに変えていきます  
長さなんか知らん（え）

サイト掲載していたもの（今は非公開）を転載しているので、今と  
書き方が違うなあと自負はしています。

少しでも楽しんでもらえるように、四苦八苦して書いてたっけなあ  
……（遠い目）

## 02・つまりは成り行きって訳で【Side彼】

「だああっ！ 何やってんだよっ！？」

俺は心の底から叫んだ。

視線の先には人間の姿がある。

が、何故か空から身一つで急降下している。いや、あれは間違いなく落ちてる。

「アズラス！」

「ぎゃおっ！！」

目元までフードを下ろしつつ、鳥型ドラゴンである相棒の背にひらりと飛び乗り、そのまま空へと舞い上がった。

いや、だってな。俺んとこの家訓が、“貰えるもんは貰っとけ。

拾えるもんは拾っとけ”だからな。

てか、目の前に人が落ちて行くのを見たら助けるのが普通じゃねえか？

俺には助けられる力もあるわけだし。

…… 上手くいけば、俺の抱えている問題の一つは解決できるかもしれないねえし。

もしかしたら…… いや、過程の話をしても意味ねえか。

と言うわけで、俺は右手を伸ばして呪文を唱えた。



02・つまりは成り行きって訳で【Side彼】(後書き)

短い……(——;) )

ですが、彼の初登場です。

二人して第一声が叫び声とk……「状況が状況だろ!」……そうです  
か。

### 03・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】

あー…、これはマジで死んじゃうよね……。死ななかつたら何者だよっ！　っつつつこめるよ……。

あ、なんか我ながら悲しくなってきた。

だって一応、生きる事に未練はかなりあるし、やりたい事とかも結構あるし、それにまだ彼氏つくってない。

……花の乙女だから、あたしでも憧れるんだからね。恋愛っていうのは。

うーん……こんなこと言ってる場合じゃないよね？

何か変なところで落ち着いてるなあ……。さすがあたしとしか言いようがないけど。ほら、何か絶体絶命になると妙に冷静にならない？

まあ、ここは一つ。もう一回叫んどきますか……。

「ああああああああああああっ！」

とそんな時、ごうつと下から突風が吹き上げて、あたしの身体を押し上げてくる。

おかげで徐々に落下速度もゆっくりになってきて、あたしは地面と衝突するなんていう恐ろしい事態は回避できた。

た、助かったあ……。

気付けばスカートが捲かれてて、髪はボサボサな上にパサパサだし、耳はなんか変な感じだし、何かあたし自身はかなりポロポロだったんだけど、助かったから良しとしよう。

あたしの中でようやく一区切りがついて、落ち着いてきた……はず。

そこで、ふと思った。

……ここどこ？

辺り一面どこを向いても砂。砂。砂。

あ、あそこにあるのはサボテンかな？　そんでもって、あたしの足元にあるこの白くて生物室で見たことがあるようなこれは、牛かなんかの頭蓋骨……っばいね……。  
つまり、砂漠に居るみたいだけど……。

何？　あたしにどうしろと？

一般女子高生が帰り道に砂漠なんかに行くはず無いよね？

……てか、どうやればこんな本格的な砂漠に行けるんだ？

あれ、そもそも何であたしがここに居るんだ？

あの、いつも踏みしめているコンクリートの道は何所行った！？  
混乱しているそんな時、ふっと暗くなったかと思うと頭の上から声而降ってきた。

「お、いたいた」

ぶわつと派手に砂煙をあげて、巨大な何かが着地した。て言うか、思いつきり眼に砂が入ったんですけど！

慌てて眼を擦って、そつと眼を開くと……思わず眼を閉じた。

あれ？　おかしいな。

あたしの眼に妄想フィルターでも掛かったのかな？

見えてはいけないものが見えちゃったぞ？

あまりに信じられないので、試しにもう一回見てみる。

……いやいやいやいや、ありえない。ありえないから！　そんなのおかしいって！

だって、誰が信じられる!?

この現代の地球に、ドラゴンが居るだなんてっ!

一步譲ってあたしの幻覚。

十歩譲って新手の嫌がらせ。

百歩譲ってこれはCGだっ!

じゃなかったら、これは夢なんだ! そうじゃなきゃ説明できない!

そんな混乱するあたしをさらに混乱の渦に巻きこませるかのよう  
に、ドラゴンの背中から人が降りてきた。

「無事か?」

心配されてる……んだよね?

でも、この人ドラゴンの背中から降りてきたんだよね?

あたし、本当に大丈夫なのかなあ……。

「あ、はあ……。多分」

「なら良かった」

そっけなく言ったその人を見上げた瞬間、あたしは息ができなくな  
った。

胸がうるさいくらい激しく動いている。

ああ、どうしよう。今のあたし、絶対顔が赤い……。

頭からすっぽりフードを被っている怪しさ全開の人が……、いや、  
怪しさ全開なのに、なんで?

ドキリと胸が騒ついている自分がここに居る……。

長いフード付きローブからはみ出ている髪はサラッサラのミルク  
色で、その髪の間隙から見える瞳は光り輝く金色。

長身で甘いマスクなんだけど、ちょっと頼りなさが漂っていて、構ってあげたくなくなるようなそんな感じ。

なんだか、とんでもない境遇にいるからかな？

いつもよりトキメキ度が高い……気がする。今ならジャージが、ただの一般人に思えるかも。

「あ、あの……」

う、うわっ！

緊張のあまり声擦れてる！？ いつものあたしは何所に消えたっ！？

と、心の中でものすごい動揺しているあたしのことなんて、分かってるのか分かってないのか分からないけど、いや、多分分かってないんだろうけど、その人は失礼なほどじいっとあたしの顔を見ていた。

そ、そんな近くに美形の顔があると、ものすごく照れちゃうんですけどっ！

「……ち、近い……んですけど」

「え？あ、悪い」

慌てて離れてくれて、ほんつとに良かった。

心臓が限界だったよ……いや、マジで。

「……まあ、人違いだったっばいな。俺が捜してた奴とはちょっと違うよ、な？ うん。多分だけど、なあ、アズラス」

一人勝手に自己完結するその人は、後ろに控えていたドラゴンに同意を求めた。

それで頷くもんだから、いやあ、良く出来てるよね、あの、ねえ？

……もちろん作り物だよね？

「いやいやいやいや、ありえないっ！ 意味分かんないってば、この展開はっ！」

「なっ！？」

「いや、どうせボロ出ちゃうし。」

今は、とりあえずこの意味が分からない展開に叫びたいっ！  
相手が驚こうがなんだろうか気にしないっ！

そう、問題は今のあたしの状況。しかも、この人いくら美形だからって、誰なのか何なのか分からないしっ！

流されてるんじゃないわよっ、しっかりしろ、あたしいっ！！

03・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】（後書き）

この頃の彼はまだマトモです。彼女もまだマトモです。

いや、始めくらいはマトモにしてあげないと可哀想かな、と思いま  
して

#### 04・つまりは成り行きて訳で【Side彼】

何だよこの女。

つてか、大丈夫なのか？ 頭の方ちよつとイっちゃったか？

いきなり叫ぶし、助けた事に対して礼も言わねえし……。あ、いや別に言われたいとかそんなことじゃねえからな。

「見慣れねえ奴だな……。人間にしては珍しい」

傍に居るアズラスに同意を求めると、アズラスも不思議そうに首を傾げた。

「えつと……。あのっ！ ここ、何処でしょうか？」

「砂漠」

「いやいやいや、それは見れば分かりますよ！ 違くて！ そうじゃなくて、もっとこうなんの砂漠か分かる程度に」

「なんのって……。適当に飛んできたから、良くわかんねえんだけど」

分かりやすいほどに肩を落とす。

そもそも、ここがどこかと言われても、分かる奴の方が少ないんじゃないかと思うんだけどな……。

というか、やけに不思議な格好をしてるよな。

黒いセーラー服に赤いリボン。セーラー服なのになぜかスカートで、しかも丈が腿辺りまでしかない。

なんだよ、この短さはっ！ 普通足首まで隠すのが常識だろうがっ！

まあ、不思議なのはその衣服だけじゃない。

その背中に掛かる程度の髪と、意志の強そうな瞳が真っ黒だった



ってこと。黒っぽい色なら何度か見かけたことはあるけど……、本当に真っ黒なんだよな。

「だから、あの、近いんですけどっ！」

「あ、悪い」

気付けば近くでまじまじと見てる。

記憶にあるあの子と良く似ているんだけど……まあ、違っただろうな。相手も覚えてるだろうし。

ただ……なんだろうな、これ。

自分でも良くわかんねえんだけど……、俺の中の魔力が落ち着かない。何かこう、ざわめくような……、違っな。これは、戸惑い？ いや、確かに戸惑ってはいるけどよ。こっつ魔力がざわざわと蠢いているってのは、初めてな感覚だ。

「何なんだろ。これは……」

自分の両手をじつと見つめて、集中しようと努力する。落ち着け、と強く強く暗示してみる。

「どろろって言うの。あたしに、何をしろって……分かんないっば」

弱々しく呟かれた声。

同時に溢れる、悲しみ。

戸惑いと混じって、消えていく……引いていく、魔力の波。

！！

って、これはっ！

「アズラスっ！」

思いつき振り返ると、勘が良いアズラスはしゆるしゆると人の形をとった。

ドラゴンの時とはまた違う、綺麗な姿をしている。  
サラサラの銀髪をなびかせて、そっと女の前に跪いた。

「……う、や……あの……」

そいつは、戸惑いつつも顔を真っ赤にして俯いていた。  
うん、まあ、その気持ちは分かるぞ。

直視できねえよな。美しすぎて見ることですら怖いよなあ。  
俺なんかしょっちゅう怒られてるから尚更……って、そうじゃなく  
くて。

「アズラ」

「すみませんでした。不躰なことをしてしまったこの馬鹿が」

「……は!？」

って、おい！ いきなり俺を馬鹿呼ばわりかよっ!？

確かに、まじまじと見た俺は悪かったとは思っけどさっ！

「集中力が高いのは褒めどころなんですけど、周りのことが一切分かっていないんですよ。気分を悪くしたようなので、本当に申し訳ありません」

「いや、あの、そんなんっ!」

頭を下げるアズラスに慌ててブンブン手と頭を振る。

もげるんじゃないか、その頭。

たとえどんなことを言われようと、まあ結局はいつものことなので特に否定も肯定もしねえけど。

気を取り直して、今感じたことを素直に聞いた。

「で、今のどつ思っ？」

きっとアズラスも魔力の波の変化について、何かしら感じ取れたと思っ。

アズラスはゆっくりと頷いた後、やけにあっさりと言いつ切った。

「この方は、この世界の人間ではありません」

#### 04・つまりは成り行きって訳で【Side彼】（後書き）

一番始めに名前が出るのはアズラスだったりします。

名前って出すタイミング難しいですね。あと付けるのも。

……基本的にフィーリングとネタで付けてますが何か。

## 05・つまりは成り行きて訳で【Side彼女】

……えーっと、つまりはこういうことかな？

異世界決定？

ドラゴンが人の姿に……ああもう、めんどくさい！ 元ドラゴンの人が断言した。

いやまあ、あたしからしてみればここは異世界なんだけれども、この人たちから見ればあたしが異邦人ってわけなんだよね。

と言うか、二人してやけに近くに寄り過ぎじゃないかな……？

美形過ぎて、平凡なあたしがなんだか申し訳なくなってくるんだけど……。

「はあ？ この世界のじゃねえって……意味分かんねえ。どうゆう事だ？」

「やっぱここ、地球じゃないんだ。まあ、そりゃまあそうだよね……」

夢オチとかもちよつとは期待していたんだけど、それにしてもよく出来過ぎているとは思ってた。

ドラゴンなんて発想出てくるはず無いもんね。

どうやらあたしは、パラレルワールドに来ちゃったらしい。なぜだかは知らないけど。

「時空の歪みに落ちたのではないのでしょうか？ 彼女は別の世界の人間ですよ」

「そうなん、ですか？」

「ええ、おそらくは」

もう片方の怪しさ全開の人とは雰囲気为正反対で、この人がまさかさっきのドラゴンだったとは思えない。

だって王子的存在。王子的雰囲気。カリスマ性と気品が漂ってるもん。なんかこう、オーラの的なものが。

「その上彼女は“S……SSクラスの人間”のようすし……」

「うわ、かなりの稀少種！……だからなのか？ この妙な感覚は」

何かぶつぶつ呟いているけれど、混乱したいのはこっちなんです  
が。

てか、あたしが何？ 稀少種？

「え、あの、どう言うことですか？ 稀少種って……」

「いや、こつちの話。つか、こんなすげえ人間、俺初めて見たわ」

「私もです」

なんか、ちょっと嫌な言い方。ううん、ちょっとじゃない。かなり嫌な言い方。

まるであたしのこと珍獣みたいなものように……てか、ちょっと待って。

さっきから引っ掛かってるんだけど、あたしの事人間間って言うてるのはなんで……？

ここであたしは嫌な予感がした。

聞いてみないと、分かんないけど……本当は、あんまし聞きたくないけど。

「あ、あの……。一つ良いですか、ね……？」

背中を冷や汗がたどって行くのが分かる。

「ごくりと唾を飲み込んで、意を消して聞いた。」

「あなたたちって、人間じゃないの？」

返ってきた答えは至極あっさりとした一言。

「  
あぁ  
」

05・つまりは成り行きって訳で【Side彼女】(後書き)

理由無しトリップパターンです。

いや、深く考えてなk…「はた迷惑すぎる!」…異世界トリップで  
きるだけいいじゃない(遠い目)

理由なー…

書きながら考えてみます)。・。・。(



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2409ba/>

---

異世界×あたし

2012年1月14日12時51分発行